

## 大江スミの留学したバタシー・ポリテクニク

柴 沼 晶 子

はじめに

1899年(明治32年)の高等女学校令の施行にともない女子高等師範学校ではそれまでの文科、理科に加えて技芸科(家事科)が新設された。その前後に安井てつと大江(宮川)スミは「家政学研究」のために文部省留学生として英国に派遣され、安井はケンブリッジ・トレーニング・カレッジに、大江はバタシー・ポリテクニクとベッドフォード・カレッジに学んだ。

前稿で私は文部省派遣留学生として選ばれたこの二人の女子高等師範学校卒業生が、同じ任務を担いながら、それぞれ異なる教員養成機関を留学中の研修の場として選び、家政を中心にした女子教育よりも人間としての人格を育てるリベラル・エデュケーションを女子教育の理想とする立場(安井)と高等女学校およびその教育を担う女子教員の目標を良妻賢母の育成におく(大江)という対照的な女子教育観を確立し、帰国後それぞれの場で日本の女子教育に貢献していったことを跡づけ、二人の留学先の教育が帰国後の教育実践を方向付けたことに注目した。その際、従来の二人の伝記のなかでそれぞれの留学先の実態が必ずしも明確でなかったことを指摘して、安井が学んだケンブリッジ・トレーニング・カレッジと大江が学んだバタシー・ポリテクニクとベッドフォード・カレッジの特色と英国女子教育史上の位置を確認した上で、二人の教育観と実践に与えた影響を検討する必要があるのではないかと述べた<sup>①</sup>。

本稿は、大江スミ(当時宮川寿美子)が1903年から1905年まで学んだバタシー・ポリテクニクについて、これまであまり知られていなかった同校の設立と発展の歴史から大江が留学した当時の同校の実像を明らかにし、大江がそこで学んだものを帰国後の教育実践にどのように生かしていったのかを検討する手がかりにしようとするものである。

文部大臣に提出した「留学申報書」及び「留学始末書」によると、大江は1902年12月にロンドンに到着後、1903年1月ロンドンにある「家政練習所」に入り、傍らベッドフォード・カレッジにおいて「衛生」を研修、同年9月から1905年7月までロンドンのバタシー・ポリテクニクに席を置いている。さらに日露戦争によって帰国が困難になったこともあって、留学期間を

1年延長してベッドフォード・カレッジの衛生科に入学した。

大江スミの先行研究においては、彼女の留学したバタシー・ポリテクニクについては「留学申報書」や「留学始末書」に記されているだけでその実体があまり知られていない。また、これまで大江の英国の留学体験としてはベッドフォード・カレッジがより重要なものと考えられてきている。勿論クイーンズ・カレッジと並ぶ当時の数少ない女子大学に学んだことは、大江にとって家政学研究の仕上げをなすものであり、科学的裏付けと社会的広がりを与えたものであったといえよう<sup>②</sup>。また、同校の衛生科が一般の学生よりも年配の、高い専門職を約束されたエリートの集まりであったことも、彼女の立場での留学の使命を果たすに相応しい研鑽の場であったといえる<sup>③</sup>。

しかしながら私は、大江が「目的が家政学でありますから、思いきってバタシー・ポリテクニクの家政科に入学しました」といって、ベッドフォード・カレッジに籍を置きながら同校を選択し<sup>④</sup>、ここで2年間研修していることを勘案すると、バタシー・ポリテクニクでの修学が彼女のその後の家政学の構想と教育実践により大きな影響を与えているのではないかと考える。したがって新たに入手したバタシー・ポリテクニクに関する以下の資料によって大江が学んだ当時の同校の姿を探ってみたい。

1. 同校の設立とその後の10年の発展を記した“The Battersea Polytechnic—A Record of Ten Years. 1894-1904”『バタシー・ポリテクニク——10年の記録1894年-1904年』（以下『10年史』と記す）<sup>⑤</sup>
2. “Pioneering in Education for the Technologies—The Story of Battersea College of Technology”『工業教育の先駆——バタシー工科大学の物語』（以下『大学史』と記す）<sup>⑥</sup>
3. “Surrey—The Rise of a Modern University—from the foundation of Battersea in 1891 to the Silver Jubilee of the University of Surrey 1991—”（以下『百年史』と記す）<sup>⑦</sup>

#### 1. 先行研究に見られる大江の学んだバタシー・ポリテクニクについての言及

1978年に刊行された東京家政学院光塩会編、大濱徹也著『大江スミ先生』は、大江スミ没後三十年祭を記念して同校の同窓会より大濱氏に執筆を依頼されたものである。それによるとロンドンに着いた大江は家政学を何処で学んでよいか戸惑い、ケンブリッジ・トレーニング・カレッジの校長であったミス・ヒューズと推測される英国人から、英国迄きて料理だけを学ぶよりも、

教育学とか、心理学とか、もっと高尚な学問を修めたほうがよいとの忠告に迷いながらも、「最初の目的が家政学でありますから、思ひきって、ロンドンの・ポリテクニク（工芸学校）の家政科に入学」した<sup>99</sup>。さらに同書には当時の英国の「家政学」は

いまだ歴史の浅い、「中等以下」の女子に家事の実際的知識を授ける教科であった。それだけにスミの勉学は学問するというよりも、強く技術の習得を中心としたものになった。かくて、ロンドンのバタシー・ポリテクニクでは、卒業するまでの2年余というもの、掃除、洗濯、料理、磨き物、衛生、育児、救急法、家事の教授法などを実地に習ったのである。こうした実地を主とせる勉学は、後にスミが「家政学」を確立しようとする際、その学問を思弁的なものよりも実用的なものとした。

と述べられている<sup>100</sup>。

これによると大江スミはバタシー・ポリテクニクの家政科に入学して、「中等以下」の女子とともに家事上の諸教科を学んだという印象を受ける。しかし大江スミは申請書の中で留学先を、「バタシー・ポリテクニク・トレーニング・スクール」（従明治三十六年一月・至三十六年十月申請書）、「バタシー・トレーニング家政師範科」（従明治三十六年十一月・至明治三十七年七月申請書など）と記している。

なお、『応用家事教科書』復刻版および『近代日本女子教育文献集 第一期』に収められた『三ぼう主義』の解説には、バタシー・ポリテクニクの家政科となっている<sup>101</sup>。また『幕末明治海外渡航者総覧・第1巻人物情報編<sup>102</sup>』にも留学先がバタシーポリテクニクと記されているが、手書きの「申請書」にはそのように読めるものがある。

これに対して常見育雄氏はその「明治期三名の家政学研究の留学者に関連して（二）——日本の家政教育と家政学発達史の一側面——」において、「大江スミの家政学研究の留学の場合」と題する章に、大江スミの留学先を「家政師範学校」という名称で申請書に報告していることを挙げ、

英語でBattersea Polytechnic School Domestic Economy と報告しているから、これが正式の校名であろう。……スミの学んだ当時どのような「履修コース」があったのか明らかでない。……なお参考のため現在の「履修コース」を示すと、次の二つのコースがある。

(a)「組織体と大量炊事の管理コース」 Institutional and Catering

### Management Course

- (b) 「ホテル管理と大量炊事の資格コース」 Hotel Management and Catering Course

このほか「パート・タイム夜間コース」 Part-time Evening Courseの「料理科・裁縫科・手芸科の免許状コース」がある。

なおロンドンには、別にバタシー・トレーニング・カレッジ・オブ・ドメスティック・サイエンス Battersea Training College of Domestic Science があるが、これはスミの学んだ学校と関係はあるが、全く別個の学校である<sup>(12)</sup>。

と述べられている。この論文にはバタシー・ポリテクニクを19世紀末のポリテクニク運動の中から設立された「工芸教育機関」であると正しく位置付けられているが、ポリテクニクの中の「家政師範科」の位置付けや実体は明らかにされていない。

まずバタシー・ポリテクニクとはどのような学校であったのかを、そこでの「家政師範学校」の位置付けを把握するためにもみておく必要があろう。バタシー・ポリテクニクは現在その大部分が1963年のロビンス報告に基づいて上級工科大学 (College of Advanced Technology) から昇格してサリー大学 (大学承認1965年) へと発展している。ここで「大部分」というのは常見氏の論文にある Battersea Training College of Domestic Science が1948年にポリテクニクから分離して独立の家政科教員養成学校になったからである。したがって、スミの留学した「家政師範科」がこのように分離独立したことを考えるならば、こちらの学校が彼女の学んだバタシー・ポリテクニクの「家政師範科学校」の発展したものと考えられる。したがって上述の「これはスミが学んだ学校と関係はあるが、全く別の学校である」という記述は正確に史実を伝えていない。このようにバタシー・ポリテクニクの実体については同校がサリー大学に昇格、発展していたことが大江スミの研究者にも知られていなかったために不明な点が多かったのである。

## 2. バタシー・ポリテクニク設立の経緯とその後の発展

バタシー・ポリテクニクの設立の経緯と大江の留学当時の状況を、『十年史』と『大学史』によって見てみよう。

1851年ロンドンで開催された世界最初の万国博覧会で英国が世界に誇示したその工業技術力は、1867年のパリでの万博で新興のドイツやフランスなどの技術力に対してその遅れが歴然と現れ、英国内では技術教育の振興が急務

と認識されるようになった<sup>(13)</sup>。しかし英国が技術教育の振興に着手したのは80年代になってからであった。技術教育史では1881年から1902年まで技術教育が急速に進展したと述べている<sup>(14)</sup>。すなわち1881年の技術教育に関する王立委員会（Royal Commission of Technical Instruction 1881-84年）が自国の技術教育と対応する外国（ドイツ、フランス、スイス、ベルギー）の技術教育の実体について調査を行い、これらの国にはるかに遅れをとる英国の技術教育振興策についていくつかの勧告を行ったことに始まる。その勧告の中で注目されるのは、学務委員会と地方参事会によって科学と工芸のクラスが設立、維持されるべきこと、それらのクラスでの科学の諸教科は実際的なものであるべきこと、そのために建物の補助金を増額すべきである、と述べていることである<sup>(15)</sup>。この勧告にしたがってその後の技術教育は地方レベルで促進され、その動きの中でポリテクニク設立の運動も地方レベルの主導で推進されていくからである。さらに同委員会は技術教育に関する法令の促進および地方参事会やその他の関係機関に情報を提供する目的で技術教育促進全国協議会（National Association for the Promotion of Technical Education）を設立した<sup>(16)</sup>。

1889年の技術教育法（Technical Instruction Act）は技術教育に地方税を支出する道を開いた。これに続いて1890年の地方税法（Local Taxation Act）は「ウィスキー・マネー」と後に呼ばれるようになる酒税を技術教育の助成に注がせることになった<sup>(17)</sup>。さらに技術教育委員会（Technical Instruction Committee—地方によってはTechnical Education Boardと呼ばれた）が設置される。その中でもっとも熱心であったのはロンドン県の技術教育委員会（London County Technical Education Board）であった。その発足時のレポートには、「ロンドンにおける技術教育がその量や質においてドイツやフランスにはるかに及ばないだけでなく、英国の地方都市にも遅れを取っている。たとえばマンチェスターの夜間技術クラスは技術教育法後の協力的取り組みによってその数を倍増させている」と報告されている<sup>(18)</sup>。これらの危機感に促された政策の動きが中等教育レベルや継続教育における技術教育の発展をもたらすことになった。

このような技術教育振興策の高まりの中でポリテクニク運動の直接の推進力となったのは、1883年のロンドン市教区慈善法（The City of London Parochial Charity Act）であった。この法律は、慈善委員会の委員たちに慈善基金を集め、その基金を首都の貧しい住民たちの福祉のために使う権限を与えるものであった。慈善委員会のもとに都市教区財団がおかれ、その目的を「首都の貧しい人々のための教育を、技術教育、中等教育、芸術教育、夜

間講義その他によって促進すること、そして広く彼らの身体的、社会的、道徳的狀態を向上させること」においた<sup>(19)</sup>。この目的達成のために委員会はロンドンにポリテクニクを設立することを提案した。これによって1887年にテムズ河南、ニュー・クロス、サウス・ワーク、パタシーにポリテクニクを設立する計画のために、南ロンドン・ポリテクニク委員会が設置され、ポリテクニクの敷地と建物を有志の寄付に依存する条件での15万ポンドの補助金が計上され、ニュー・クロス、サウス・ワークに続いて、1894年にパタシー・ポリテクニクの設立を見ることになった<sup>(20)</sup>。

『十年史』によると、パタシー・ポリテクニクの敷地や施設のために民間の有力者からの寄付が続々と寄せられ、王室もポリテクニク運動に関心を寄せ、1892年7月の建物の定礎式にエドワード七世（当時皇太子）が家族とともに出席し、自ら定礎したことが記されている。1893年のクリスマスに建物が完成し、94年1月から生徒の受け入れをはじめ、2月24日に開学の運びとなる。パタシー・パークに面して立てられた校舎は19世紀ルネッサンス様式と呼ばれる壮麗なもので、施設、設備面でも当時の一流の工業系教育機関として遜色のないものであった。理事会の構成は、教区慈善財団から5名、ロンドン県参事会から2名、ロンドン学務委員会から2名、その他5名となっている。教員もそれぞれの分野で卓越した人々が集められたが、校長として任命されたのは学識、経営手腕、人格等いずれにおいても卓越した人物と目されたウェルズ氏であった。

ポリテクニクの学部組織は機械工業および建築販売、電気工業および物理学、化学、女性関係科目、美術、音楽の6学部から成っており、64科目で115のクラスが用意された。この他、商業、図書館関係の科目、体育のクラスが提供された。住民の多様なニーズに応ずるための学校またはクラスが用意された。入学者は男子1,556名女子850名の合計2,406名であった。これらの学生の職業は見習、建築や機械の職工からタイピスト、家事使用人主婦まで、それにわずかの教員と他の専門職が混じっており、ポリテクニクが貧しい階層の人々の多様な要求に応じていたことを示している。これらは主として夕方のコースであったが、これに加えて昼間にも高価な施設設備を活用するために、公立小学校で奨学金を得た男女子生徒のための全日制中学校、男子のための全日制技術学校、女子のための家政学校と家政師範学校、美術と音楽のパート・タイム昼間クラス、小学校教員のための化学、冶金、美術の土曜特別クラスなどが加えられた。大江が入学したのは、この家政師範学校（Training School of Domestic Economy）である。『十年史』にはポリテクニク開校後の目覚しい発展が示されており、学部も数学、自然科学、写

真、美術、言語と商業、音楽、体育が増設され、学問水準も高まり、ロンドン大学の学位準備コースも備えるまでになっている。勿論このようなポリテクニクの発展はバタシーだけのことでなく、1904年までには500人を超えるポリテクニクの学生がロンドン大学の学位を目指していたとされ、シドニー・ウェブは、「特許状や学長、免許や学位の権威を持つ地方の大学でさえロンドンのポリテクニクにおけるほど大学レベルの学習をしてはいない」と誇らしげに述べている<sup>(21)</sup>。

次表は開校後10年間の学生数の推移である<sup>(22)</sup>。

表 1

| 昼間学校およびコース<br>週20-30時間 | 1894年 |     |       | 1904年 |       |       |
|------------------------|-------|-----|-------|-------|-------|-------|
|                        | 男子    | 女子  | 合計    | 男子    | 女子    | 合計    |
| 全日制中等学校                |       |     |       |       |       |       |
| 理 科・商 業                |       |     |       | 113   | 67    | 180   |
| 工 業 技 術                | 45    |     | 45    | 23    |       | 23    |
| 家 政                    |       | 24  | 24    |       | 50    | 50    |
| 社会人学生                  |       |     |       |       |       |       |
| 家 政 師 範 学 校            |       | 11  | 11    |       | 87    | 87    |
| 技 術・工 芸                |       |     |       | 57    |       | 57    |
| 大 学・一般科学               | 2     |     | 2     | 7     | 2     | 9     |
| 美 術                    | 2     | 8   | 10    | 6     | 21    | 27    |
| 合 計                    | 49    | 43  | 92    | 206   | 227   | 433   |
| ロンドン南西鉄道<br>見習工・早朝クラス  |       |     | 74    |       |       | 74    |
| 昼間・夜間クラス               |       |     |       |       |       |       |
| 機 械 工 学・建 築            | 206   | 3   | 209   | 1,115 |       | 1,115 |
| 貿 易                    | 229   |     | 229   | 507   |       | 507   |
| 一 般 商 業                |       |     |       | 27    |       | 27    |
| 物 理・電 気                | 146   |     | 146   |       |       |       |
| 物 理                    |       |     |       | 225   | 7     | 232   |
| 電 気                    |       |     |       | 398   | 8     | 406   |
| 化 学                    | 41    | 1   | 42    | 238   | 20    | 258   |
| 数 学                    | 101   | 9   | 110   |       |       |       |
| 理 論 数 学                |       |     |       | 86    | 7     | 93    |
| 応 用 数 学                |       |     |       | 156   | 1     | 157   |
| 自 然 科 学                | 38    | 44  | 82    | 18    | 107   | 125   |
| 写 真                    | 28    | 4   | 32    | 45    | 16    | 61    |
| 言 語・商 業                | 505   | 111 | 616   |       |       |       |
| 言 語                    |       |     |       | 180   | 110   | 290   |
| 商 業                    |       |     |       | 278   | 201   | 479   |
| 美 術                    | 118   | 67  | 185   | 218   | 83    | 301   |
| 音 楽                    | 262   | 295 | 557   | 84    | 101   | 185   |
| 家 政                    |       | 188 | 188   |       | 471   | 471   |
| 体 育 (男子)               | 87    |     | 87    | 124   |       | 124   |
| 見 習 い                  |       | 67  | 67    |       | 320   | 320   |
| 合 計                    | 1,761 | 789 | 2,550 | 3,699 | 1,452 | 5,151 |

この表から見えるように、ポリテクニクは技術教育の振興だけを目的とした狭い意味での工芸学校というよりは、1870年の初等教育法によって整備されてきていた小学校<sup>(23)</sup>に継続する普通および技術中等教育と継続教育として庶民の多様な要求に応じてコースを用意していたことがわかる<sup>(24)</sup>。まさに「ロンドンにおいて目覚しく発展を遂げたポリテクニクはドイツ的な意味での高等工業カレッジではなかったが、博愛主義と継続教育と工業教育の英国的ブレンド<sup>(25)</sup>」であったといえる。注目されるのは就学者の増加だけでなく、校舎の増築と1894年の創立時のコースがわずか10年の間に多様なコースへと発展することに見られるように時代の要求に応じた専門化を迫られていったことである。

### 3. 大江スミ留学当時の「家政師範学校」とその後

ポリテクニク内の全日制中学校の開設に続いて、理事会は技術教育委員会からポリテクニク内に家政学校と家政科目を教える教員を養成する学校を設置するように要請された。委員会はその維持のために奨学生を送ることを申し出た<sup>(26)</sup>。理事会はこれを受け入れ、1894年2月にこれらの学校を開設した。家政・女子学部の中に女子のための家政学校と師範学校が位置づけられ、学部長が両校の責任者となった。科目には、料理、裁縫、衣服製作、洗濯法、食物科学を含む家政、洗濯工程、衛生、生理学、救急法、看護法、教育原理と実習、黒板画法、発声法があり、後に植民地研究と一般家庭訓練の特別コースが加わった。1895年10月から同委員会によって、料理、洗濯、家政の養成所として認定され、国内で最初の適切に組織された教員養成コースとして、奨学金が支給された。最初の4年間、学生は技術教育委員会によって設置されたロンドンの家政委員会による教育免許 (teacher's diploma) の試験を受けたが、1898年よりその仕事を再編成された全国家政師範学校組合に委ねることになった。師範学校はその傘下に入り、以後学生はそこでの試験を受け免許状を得た。

家政師範学校は国内で初めて家政の諸科目を養成コースとして組織して設立された最初の学校のひとつであり、家政のトレーニングを統合し、教育の理論と実践と実験を伴った科学の教授を含んでいた。またポリテクニクでは唯一の教員養成機関であった。

大江の留学当時の教員は19人であった。申報書には「教育ヲミス・マースデン、生理衛生ヲミス・ウェップ、化学ヲウィルソンニツキ研修ス」とあるが、マースデンは家政成師範学校の基礎発展に尽くした人であり、ウェップはロンドン大学で科学を学び、衛生学と心理学を師範学校で教え、夜間の女

子学部の責任者であった。ウィルソンは化学部の部長であった。このほか救急法や看護法は女性の医師が担当していた。教育実習はポリテクニク内の中学校、家政学校、夜間クラスで行われた。

『十年史』には開校当時は11人であった学生が1904年には84人となり、英国全土から集まり、はるばるオランダや日本からも来ていることが記されている。この日本人こそ大江スミのことであろう<sup>(27)</sup>。

師範学校の重要性や教育的評価は高まり、10年間の卒業生322名が611の教員免許を得て、177名が国内外で教職に就いている。その内訳は、ロンドンのポリテクニク10、技術学校30、女子中学校23、県立学校22、家政師範学校(母校)14、小学校56となっている。このように、家政師範学校は僅か10年間に教員養成機関として大きな実績を挙げている。小学校における家政科関係の科目は、改正法典(Revised Code)における裁縫を皮切りに、1878年に家政(home economy)、1882年に料理、1890年に洗濯を補助金交付の対象とした。その効果は著しく、これらの科目の履修者は飛躍的に増大した。例えば、料理は、補助金の対象となった授業を受けた生徒は初年度で457校から3,759名であったが、表2に見るように増加している<sup>(28)</sup>。

表2

|            |       |         |
|------------|-------|---------|
| 1885-1886年 | 643校  | 12,348人 |
| 1887-1888  | 882   | 30,431  |
| 1889-1890  | 1,294 | 57,539  |
| 1891-1892  | 1,501 | 68,291  |
| 1893-1894  | 2,322 | 108,192 |
| 1895-1896  | 2,729 | 134,930 |

このように小学校に限っても家政関係の教員の急速な需要の増加があったことがわかる。また表1に見られるポリテクニクにおける家政科の生徒数の増大から見ても、家政科の教員の養成、すなわち家政師範学校への期待が大きかったことが推測される。『大学史』は家政師範学校が当初から一貫して主要な役割を果たしてきたことを評価している。このように家政の教員養成機関として名をなしつつあったバタシー・ポリテクニクの家政師範学校にロンドンに到着して間もない大江が担った使命を果たす手掛りを求めたであろうことは想像にかたくない。なお彼女の住所は1903年から84 Overstorand Battersea Park London S.W. England となっている。

その後の家政師範学校の消息について辿っていくと、以下ようになる。先に引用した常見氏の記述に関して事実を明らかにしておこう。

第2次大戦による校舎の損傷の復旧作業も進んで、1945年から46年にかけて

て、大戦間に急速な進歩発展を遂げた科学技術の水準に合わせるために、ポリテクニクは技術系のコースの改革と規模の拡大を迫られた。バタシー・ポリテクニクは入学者の増加のために近隣の小学校にまで学生が溢れることになったので、敷地の購入が緊急課題となった。家政師範学校の敷地の購入計画を進めていく途上で、文部省から新たに出された師範学校の基準を充たすことが不可能と判断されて、家政師範学校はロンドン県参事会の管理に委ねられることになった<sup>(29)</sup>。『大学史』は家政師範学校の分離を惜しんで「(同校は) 最高の校長と教授陣を備え、世界各地に教職その他の専門職で責任のある地位で活躍する卒業生を送り出した。この種のカレッジの大規模なものの一つであり、その評判は最高であった。一方ロンドンの参事会は多くの教員養成カレッジを持っているが、家政学の教員養成カレッジを持つのは初めてであった」と記している<sup>(30)</sup>。

こうして1948年に家政師範学校はバタシー・ドメスティック・トレーニング・カレッジとして有志立学校から公費維持学校へ移行することになったのである<sup>(31)</sup>。移行当初は緊密であった両校の関係も時の経過とともに次第に関係が薄れていったとされる。一方ポリテクニクには1949年にチェルシー・ポリテクニクの家政学部が閉鎖となり、ロンドン参事会がその吸収を打診してきた。バタシーは吸収によって施設設備の補助を得ることが可能となるため、当時の家政学部長が描いていたホテルと大量炊事の新しいコースを開校する英断が下された<sup>(32)</sup>。

常見氏の「スミの学んだ当時どのような履修コースがあったか明らかではないが、参考のため現在の履修コースを示すと、「組織体と大量炊事の管理コース」と「ホテル管理と大量炊事の資格コース」がある」という記述は、バタシー・ポリテクニクが上に述べたチェルシー・ポリテクニクの家政学部を吸収して「ホテルと大量炊事」の新しいコースを設置した史実と一致する。また、「バタシー・トレーニング・カレッジ・オブ・ドメステック・サイエンスはスミの学んだ学校と関係はあるが、全く別の学校」というよりはむしろこちらの方がスミの学んだ家政師範学校を受け難い学校といえよう。

なお、戦後強力に打ち出された科学技術教育の振興政策に沿って、バタシー・ポリテクニクはすべてのマイナーな部分を「そぎ落とし」、全学を高等教育と研究に集中させることによって、技術系高等教育機関への発展を遂げるようになった。1956年の高等技術白書によって、1957年同校は高等技術カレッジ (College of Advanced Technology) に指名され<sup>(33)</sup>、1963年のロビンズ報告の大学昇格勧告で、その筆頭に挙げられ、サリー県のギルフォードに

移転、1966年に特許状を得てバタシー工科大学からサリー大学へと昇格したのである。

#### 4. 大江スミがバタシー家政師範学校で学んだもの

いうまでもなく、大江の留学の成果が彼女の女子教育観や教育実践にどのような実を結んだかは、ベッドフォード大学における研鑽や英国内およびヨーロッパの教育事情視察の体験などを総合して、帰国後の教育活動を詳しく見ていく必要があるが、ここでは彼女の家政学の基本となった家政師範学校での学習体験を考えてみよう。

大江が文部大臣に提出した「申報書」の中で最も強調していることは実習の重要性である。

諸所ノ学校ニツキ感ゼシハ、学校ノ組織及ビ科目ナドハ我国ト大差ナシト謂モ、当地学校教育ハタダニ理論ヲ教スルノミナラズ、実習ヲ主トシ、生徒ヲシテ自カラソノコトニ当タラシメ、他日学校ヲ出シ後、実施シヤスカラシムルコト、及ビ諸科学ノ関連セルコトナリ。……コノ他理化学上ノ知識ノヨク日常ノ事項ニ応用セシムル如キ、是等ハ些少ノ如クナレドモ、我学校教育上考エルベキコトト思ヘリ<sup>(34)</sup>。

このことは当時最も施設設備の整っていたといわれる家政師範学校で、大江が「各学科イズレモ実習ヲ主トシ、理論コレニトモナフ」家政関連科目を研修し痛感したことであろう。料理、洗濯などの科目の他に必修科目には家事取締法、家事衛生、化学、教育理論があり、家事の実地の訓練だけでなく、指導者としての理論科目があり、たとえば化学担当のウィルソンはポリテクニクの化学部の部長であったことも注目される。

また大江の英国留学の総決算と言われる主著『三ぼう主義』のなかでも日本の家事教育における実習の重要性を繰り返し訴える。

英国では実地が4分の3で理論が4分の1である。日本では、女子教育中家事科に最も重きを置いているにも拘わらず、その設備については二十年此の方発達した英米より遙かに劣っている。割烹教場の如きは、その面積も狭く、二三の割烹台の周囲にごたごたと生徒を立たせて各生徒が自由に実習することもできない。一鉢の味噌を多数の生徒がするのは、丁度裁縫で袖口を多数の人々が縫うのが不可能且無効であると同様であると思う。

と述べている<sup>(35)</sup>。

しかも家事教育における実習の強調は、大江にあっては、技術習得の徹底だけを目指すものではない。「理論のみ教えることによって生徒は物知りのつもりになり、自然傲慢な品性となり、真面目でなく、浮き浮きとした活用し難い人となる。実験・実習をさせ実地に教え込むならば、謙虚で真面目な人を作ることができる」というように、それが生徒の品性に及ぼす影響を重視するものであった。

この実地教育は普通教育上大事なことで、ぜひこの点に重きを置かなければなりません<sup>(36)</sup>」というように、実習は人間形成的意味を持っていた。

バタシー・ポリテクニックでスミが学んだ第2の点は家事教育に当たる教員の責任であろう。当時教育理論を担当していた校長のミス・マースデンは家政師範学校の優秀な卒業生であり、母校の基礎と発展に尽くした人物として『大学史』に名を残している<sup>(37)</sup>。

「英国の家事教授に関する人々は、総て女子をもって成立されておるは勿論、之が監督の任に当たる視学官に至るまで悉く家事の知識を有する、婦人の手によって組織せられて居る<sup>(38)</sup>」ことを身近に見てきた。設備の不備から実習を十分行うことの出来ない理由を次のように挙げている。

1. 家事科教員自身がどのような設備をするべきかわからぬこと。
2. たとえそのような知識があっても、女子は信用がなく、機械を備えてもそれを使用できるのかと疑われる。
3. 大抵上に立つ人々が男であるから、家事についての知識乏しく、家事教授上の設備に同情がない<sup>(39)</sup>。

したがって、「真面目な、技能ある生徒を養成するには、教員は相当の予算を立て見積書を作る丈の知識と熱心さを持って、今後は各学校に相当なる設備をして、わずかなる時間の実習することが出来る様勤めなければならない」と、教員に家事科経営能力の必要であることを力説している。

このように大江がバタシー・ポリテクニックで学んだ実地を重視した家政教育は、あくまで家政科教師養成としての教育であったのであり、それは当時の英国にあって高い評価を得ていたものであった。

## 註

- (1) 柴沼晶子、研究ノート「英国留学で得たもの—安井てつと大江スミの場合を比較して—」『教和学園大学研究紀要』第8号、1999年。
- (2) 大濱徹也『大江スミ先生』東京家政学院光塩会編、昭和53年、88-89頁参照。
- (3) なおベッドフォード・カレッジとの関わりについては、柴沼、前掲研究ノート、

255頁参照。

- (4) 従明治三十六年一月・至明治三十六年十月の「申報書」には「明治三十六年一月十九日ヨリ同年六月二十八日マデ、英国倫敦ベッドフォード・フォー・ウーメンニ入り、ミス・ワーザストーンツキ衛生交換法ヲ研修シ、……同年九月十五日ヨリ、パティシー・ポリテクニク・トレーニング・スクールニ入り、洗濯法ヲミス・マレー、料理法ヲミス・ビーフ、裁縫ヲミス・バタスレー、教授法ヲミス・マースデン、化学ヲウィルソン、衛生ヲミスウェブ、救急法ヲイーバンスニツキ研修ス。……明治三十六年一月ヨリ六月マデノ授業料トシテ、ベッドフォード・カレッジヘ英貨十五ポンド十一シリングヲ納ム」とある。
- (5) *The Battersea Polytechnic—A Record of Ten Years. 1894-1904*, 100頁の小冊子、非買品、1997年サリ—大学訪問時に University Archivist, Arthur Chandler氏より次の『大学史』とともに恵与された。
- (6) H. Arrowsmith, *Pioneering in Education for the Technologies—The Story of Battersea College of Technology*, The University of Surrey, 1966.
- (7) Roy Douglas, *Surrey—The Rise of a Modern University—from the foundation of Battersea in 1891 to the Silver Jubilee of the University of Surrey in 1991—*, University of Surrey, 1991.
- (8) 大濱、前掲書、86-87頁。
- (9) 大濱、前掲書、88頁。
- (10) 大江スミ『応用家事教科書』復刻版、第一書房、昭和57年、および『近代日本女子教育文献集 第一期』所収『三ぼう主義』日本図書センター。
- (11) 『幕末明治海外渡航者総覧』第1巻人物情報編、柏書房、1992年。
- (12) 常見育雄氏はその「明治期三名の家政学研究の留学者に關連して(二) —日本の家政教育と家政学発達史の一側面—」、『家庭科学』第89集、1982年、18-19頁。
- (13) 藤井泰『イギリス中等教育制度史研究』風間書房、平成7年、190-191頁参照。
- (14) M. Argles, *South Kensington to Robins—An Account of English Technical and Scientific Education since 1851*, Longmans, 1964. p.31. この時期の工業教育の歴史については P. Summerfield, and E. J. Evans, *Technical education and the State since 1850—Historic and Contemporary Perspectives—*, Manchester U.P., 1990.参照。
- (15) *Ibid*, p.32. この委員会はサムエルソンを委員長とし、サムエルソン委員会と呼ばれる。同委員会については藤井、前掲書、214頁、および森川泉著『イギリス中等教育行政史』風間書房、平成9年、205—207頁参照。
- (16) M. Argles, *Ibid*, p.33.
- (17) *Ibid*, p.35.
- (18) *Ibid*, p.37.
- (19) 『十年史』および『大学史』、p.1.
- (20) 『十年史』および『大学史』、p.2.
- (21) Argles, M. *op.cit*, p.40. ウェップは1902年のロンドン県参事会に当選し、「1902年法のモデルとされたロンドン技術教育評議会」の設立に関わり、科学技術教育の振興策を推進した。大田直子『イギリス教育行政制度成立史』東京大学出版会、1992年、256-260頁。
- (22) 『十年史』Appendix 1. pp.88-89.
- (23) 1870年初等教育法後就学が義務化されたのは1876年および1880年基礎教育法によ

る。また1891年教育法によって授業料無償制度が導入された。

- (24) J. Roach, *Secondary Education in England 1870-1902—Public Activity and Private Enterprise*—, Routledge, 1991, p.87によると、当時の“technical”という語は広い意味に解されていた。その主要な領域のひとつは成人労働者の成人教育であった。
- (25) M. Argles, *op.cit.*, p.39.
- (26) この女子のための家政学校の入学者は全員教育委員会から奨学金を与えられた公立小学校の卒業生であった。
- (27) 『十年史』 p.66. The Training School hours are twenty-five each week, and, as a general rule, the students have dinner and tea within the building, and enjoy a good deal of corporate college life. They come from all parts of the U.K, and even from abroad, students have journeyed from Holland and Japan. (イタリック筆者) この箇所を含む家政師範学校の記事が1904年3月24日号の *Education* 誌に掲載されていることを藤井泰氏より教示された。後にこの記事が『十年史』の一部であることを知った。
- (28) A. J. Cooper, “Domestic Economy Teaching in England”, *Education Department, Special Report on Educational Subjects*, Vol.1, 1897, p.158.
- (29) 『百年史』の年譜ではこの教育委員会への委譲が1939年となっているが、第二次大戦後の教育改革(1944年教育法)による改革であると考えた方が正しいと思われる。同書のこの点についての記述には参考文献に1947年10月15日付けの理事会の議事録が挙げられているので、年譜の誤りであろう。『大学史』には、1936年頃食料省 (Ministry of Food) による「食事教育キャンペーン」のために大いなる貢献をしたとある。
- (30) 『大学史』 p.82.
- (31) 1944年教育法の制度改革によって設立母体が有志団体であっても地方教育当局が維持費を負担する場合 *maintained school* となる。
- (32) 『大学史』 p.89.
- (33) 1957年にCATに指定されたのは8校である。
- (34) 「申報書」明治36年12月24日付け。
- (35) 大江スミ『三ぼう主義』宝文館、1917年、98-99頁。
- (36) 同、105-109頁。
- (37) 『大学史』 p.13.
- (38) 大江スミ、前掲書、98頁。
- (39) 同、100頁。